

いせおんどこいのねたば

伊勢音頭恋寝刃

〔解説〕

天保九年（一八三八）大坂稻荷東の芝居初演。伊勢の古市を舞台にした夏狂言の代表作です。

〔あらすじ〕

福岡貢は武家の生まれですが、今は伊勢にきて御師（下級神職）となり、旧主今田万次郎が紛失した青江下坂の名刀を捜しています。刀は手に入れたものの、その折紙（鑑定書）が見つかりません。

古市の遊郭油屋のお紺は貢と相愛の仲ですが、客の徳島岩次が折紙を密かに懐中していることを知り、岩次に身をまかせると見せかけ、折紙を手に入れようとしています。

お紺と岩次の盃事が始まりました。そこへ貢がやってきます。お紺の気持ちを知らない貢は激怒し、お紺からは別れ話を持ち出され、遣り手の万野からもなぶられ、油屋から追い出されてしまいます。一旦引き下がる貢ですが、その恨みから妖刀・青江下坂に取り憑かれたように、油屋の奥庭で次々と人に斬りつけてゆきます。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

（一般社団法人 義太夫協会発行）

古市油屋の段

こそは立ち帰る。

後にお紺はうつとりと、しばし思案にくれ告ぐる、遠寺の鐘も身にしみて、ときつく胸の闇やゝあつて顔を上げ、

「せっかく思ひ思はれて、二世と交した貢さん、のかねばならぬ浮世の義理。今伯母御様のお詞には、

『許婚の榊さんと祝言をさゝねば、養子親への義理が立たぬ故、思ひ切つてくれ』と、事を分けてのお頼み、とは言へこれが何とまあ、一夜流れの仇夢も、別れは惜しき明けの鐘、炎の中に暮らそうか、あなたを退いて片時も浮世の日影が見られうか、むごいつれない胴欲な、別れと云ふ字を聞いてさへ胸にしみじみ悲しい」

と恨み涙にくれいたる。

「お紺さんくくくはどどこにぞ」

と云ひつゝ出て来る遣手の万野、見つけれれじと文巻き取り、心もうわの空封じ、知らぬ万野は声高に、

「お紺さんくくく、お紺さんそこにかいな、そんな事知らずに、一遍と尋ねましたわいな、イヤコレシコレお紺さんへ、モ今更言ふぢやないが、この間からも勧めているアノ岩次さん、モ大体良いお客じゃないぞえ、それにお前も物好きなの、いかに心中立てるとて、アノかす禰宜の貢づら、オホくくくお紺さん、堪忍しておくんなはや、ハくくく。モ今もいとてお鹿さんが、貢さんから度々の無心状、誠かと思ふて身の皮はいで打ち込んだが、モウ悔しいと私への懺悔、コレシコレこの文を見やしゃんせ、アノ口先でちよぼくさと、古市中の女郎の油をねづり廻る

油虫、モその油虫の事はと思ひ切り、岩次さん
になびかんすりやお前も出世、コレシコレお紺さん
へ、この万野は悪い事は勧めませぬぞへ、モ、
ふつつりと思ひ切らしやんせ」

とたきつけかける詞のわら、それとは知れど、真顔
に受け、

「ヲ、成程、この状の様子では、興の覚めた貢さん、
そんならお前の言わしやんす通り、岩次さんに乗り
替へうわいな」

「エ、アノお紺さん、そんならお前はん、ほんまに
岩さんに乗る替へる気かへ」

「何の嘘を言ふものかいな」

「お紺さん、ア、好きやヨヤ／＼よ、ホ、
ヤコレ、近年の大出来ちゃわいなお紺さん、ア、よ
さやヨヤ／＼よ、ホ、
そんならすぐに奥へ行

て、改めて固めの盃、サア／＼おいで」

と無理やりに、引つ立てられて詮方も涙隠して入り
にけり。かくとは知らず、うと／＼と、恋には心引か
れ来る、身の災難に福岡貢、とやかく案じたゝずみ
ける。

「ム、あの唄は、油屋の二階座敷、阿波の客が居続
け騒ぎ、テモ面白さうに唄いおるな、それに引替
え心ならぬは万次郎様のお身の上、今宵につづまる
御身の難儀、お紺に頼んだ折紙の詮議、今に何の返
事も無いは、コリヤ岩次の手に無いのか知らん、マ
ア何にもせよ、お紺にちよつと逢ひたい」
と見廻す内より出て来る喜助、出会ひ頭に、

「ヤア若旦那さん」

「ヲ、喜助か、ヤ幸ひ／＼、どうぞ首尾してお紺に
一寸逢わしたも」

「へい、かしこまりました」

と奥口見廻し、

「イヤ申し若旦那さん、はばかりながら一寸あれへ」

「喜助、わしにか」

「へい」

「何の用じや」

「モ、今改めて申し上げますは如何なれ共、いつぞ

やお国の騒動より、この伊勢路へお引越しなされま

して、あなた様には福岡へ御養子、それ故親共も奉

公引いて、この古市にてわづかな暮らし、そののち

大病を患ひ、今際の枕元へ私を呼び、アノ福岡孫太

夫様の御養子貢様は、我々親子が古主の若旦那様、

随分共に心をつけて、忠義を尽くせ、と親共が遺言

でござります」

「ム、スリヤそちは喜兵衛が伴であつたよな。さ

すれば我が為にも家来同然、古主を忘れぬそちが意

見、悪うは受けぬ、忝い、がマア、それは格別、コリ

ヤコレ、大切な一腰、わしが持つていては人目に立

つ、帰る迄預かつてたも」

「へい、私がしっかりとお預り申しました」

「ア、コレ、その一腰は、青江下坂」

「エ、そんならこれが」

「いかにも、刀は手に入れども、これについたる折

紙を騙られ、モ色々と詮議をすれ共、今において行

き方知れず、何とぞ折紙を取り返さんと、毎夜ここ

へ入り込むも、もしや詮議の手掛かりも有らふかと、

心を砕く某、ア、コレ、必ず他言は無用ぢやぞや」

「ヤコレハ、左様とも存ぜず、慮外の段は真平御

容赦、シテその折紙を騙つた奴が、この油屋の内に」

「サ、確かにそれとは知らね共、もしやと思ふはア

ノ奥の、アコレ喜助、一寸耳を貸しや」

「へい、エ、そんならアノ岩次が」

「ア、コレシイ、秘かに、何かは奥の大騒ぎに」

「首尾を作るは最究竟」

「そんなら喜助」

「若旦那さん、サアかうおいで、なされませ」

と先に立つ、案内につれて福岡貢、のれんの奥へ入りにけり。こなたの障子引明けて、伺い出でたる徳

島岩次、何か心に打ちうなづき、差し足抜き足のれ

んの内、忍び入って二腰の刀をそつと後先見廻し、

おのが刀と貢が刀、手早に目釘コツコチ、身をす

り替へる即座の悪知恵、のれんの影より伺う喜助、

それと白刃の二腰を、元の如くに差納め、又も納戸

へ持つて入る。お紺はすぐす無理酒の酔ひに心も乱

れ足、

「岩次さん」

と呼び立てられて、出て来る岩次、

「ヲ、岩さんとした事が、座敷をはづしてお前はど

こへ」

「ア、イヤ、一寸手水に」

「アノマア嘘ばつかり」

「エ、何の嘘を言ふてよいものか、証拠人は、北六、万野、ソレ、用意よくば早これへ」

と云ふ内奥に声高砂

へ相に相生の松こそ目出度かりけれ

北六万野が取りに、とさん盃硯蓋、名々にたづ

さへて、

「サア、申しお紺さん、岩次さんへの固めの盃、

色直しはすぐに床入り」

「サア、媒介役はこの北六、嫁君から呑んで差し

給へ」

と無理に突きつけつぎかくれば、堪へかねて駈け出る貢、お紺が盃引ったくり落花微塵と投げつけたり。

「ヤイお紺、おのりやこの盃しては済むまい〜ぞよ」

「ム、誰かと思へば貢さん、お客と盃するがどうして済まぬへ」

「イヤサ、一通りの盃なら格別、この盃斗りさす事は、ならぬわい、コリヤお紺、おのりやこれ迄言ひ交わした事皆忘れたな、モ最前から見ていれば、ほてくろしい座敷ぶり、エ、も了見が」

と立ちかかるを、岩次は引きのけ、

「ヤイ〜〜かす禰宜の大馬鹿者め、身が揚げ詰めの女郎に指でもささば、ほでも、すねも、ぶち折るぞよ」

と云ふに万野がしやしり出で、

「コレシコレ貢さん、お前はんはマアこちの内へ、誰が許してござんしたへ、お前の様な油虫はな、顔見るのも胸が悪いアイ、起縁が悪い、サア〜〜〜とつとと去んで貰ひましょ」

とずっかり言われて、尚せき立ち、

「コリヤ万野、わりやマア味な事云ふな、この貢が女郎の油をいつ吸ふた事が有る、サア〜〜〜、それ聞こう〜」

「ヲ、アノマア白々しい顔わいな、ヤコレシコレお紺さんへ、最前の文、見せてやらんせ」

と云ふにお紺が懐より、取出し渡す以前の文、いち〜貢が見てびっくり、

「ヤコリヤおれが名を騙って、女郎のお鹿へ無心の

状」

「何と覚えがあらふがな」

「イヤ、知らぬ、元より訳ある仲じゃなし、こんな文
やつた覚へはない、あた汚いあのお鹿、風俗と云ひ
顔と云ひ、しつかい猿芝居のお染、余り呆れて物が
云はれぬ」

と悪口聞いて、駈け出るお鹿、貢が前に台白なり、

「コレシコレ貢さん、最前から聞いていれば、お前
さん余りじゃぞへ〜、アイ、私やどうでお紺さん
の様に美しうはない、〜けれど、顔でお客は取ら
ぬぞへ、コレ、肝心の時にはな、ぐったり堪能さすに
よつて、ついに一日お茶ひいた事はござんせぬ、お
前もそれを見込みに、アノ万野さんを頼んでつけ文、
その度々に、ア、コレ〜見なされ、この通りにな、

二歩一寸お貸し、ア、ソレ又、この状に三歩貸せ、
エ、まだここにある、ソレ見なされ、又一両いるの

と、モ親にも聞かぬ無心をば、五度や十度の事かい
な」

「エ、何を」

「それに今更知らぬとは、ソリヤお前卑怯じゃ〜
〜わいな、筆先でたらし込み、身の皮はいだ生盜
人、エ、腹の立つ〜」

と、言ひつつ両手に胸づくし、引つつかむ手をもぎ
放し、

「エ、様々のたわ言、身不肖なれども福岡貢、そち
らに無心言ふ様なおれじゃないわい、コリヤお紺、
これには何ぞ訳が有らふ、訳を言へ、どふじゃ〜
ヤイ」

「ヲ、お前の内証の文が私の手に入り、腹の立つ
はコリヤ尤もでござんす、ガ申し貢さん、お前と私
が仲は、人も知つた、サ仲ぢやぞへ、モウまい〜」

「、まいつかずと、早ふ去んで下さんせ」

と口には言へど心には、『ヲ、道理でござんす道理ぢや』と、言ふに言われぬこの場の仕儀、血を吐く思ひ押し隠す。知らぬ貢は腹立ち涙、傍に北六高笑ひ、

「ハ、ハ、コリヤをかしいわい、客が女郎の物騙して取るとは、こいつは新しいわい、コリヤ新版じゃわい、ハ、ハ、ハ、これが本の伊勢乞食じゃ〜」

何がな当たる憎て口、岩次も片頬にせせら笑ひ、

「ア、イヤモ聞けば聞く程馬鹿な詮索だわい、お紺が心底聞く上は、今夜中に身請して身が女房、ドレ、金の威光を見せうわい」

とお紺がひぎを仮枕、すねふん反らす傍若無人、見るに貢は齒ぎしみ齒切り、

「チエ、見違うた、アノここな、どふ畜生、その根性とは知らず、大事を明かしたが、エ、無念なわい、と

は云へおのれに限つてよもやその様な根性とは知らなんだ、エ、知らなんだわい」

と、にらむ眼にはら〜涙、お紺が胸はなほ百倍、破裂く斗いのせ苦しき、涙まぎらす煙草さへ、炎にむせる思ひなり。納戸に始終立聞く喜助、刀を持って走り出で、

「貢様、モウお帰りなされませ、悪い事は申しませぬ〜、サ、お預り申したお腰の物」

と差出す刀、ひったくり、腰に差す間も気はしゆらくら、刀の違ひに目もつかず、万野は傍へ立寄つて、

「コレシコレ貢さん、お前はんはもうそれでしゃべり仕舞ひかへ、ヲ、気の毒やの、コレシコレ貢さん、一寸こちらへおいなんせ、サア〜〜早ういなん

せ、エ、早うおいなんせと言ふに、ヤナニ貢さんエ、最前から段々の失礼、サ、ハ、ハ、お腹が立とう、

ヲ、ご尤もでござんすくく、が、私に免じてど

ふぞ、堪忍して上げておくんなんせ、コレシコレ貢

さん、なんぼお前がやきくくやきくく思は

んしてもソレ、ぜぜの切れ目が縁の切れ目じゃわい

な、アノお紺さんを恨みなさるる事は微塵も無いぞ

へ、お前のその素寒貧を恨まんせ、モ本にくくお前

の様な貧乏神、片時置くも内の不吉、サアくく

とつととお帰りくく、アイよふおいなはったエ、

エ何、煙草入れお忘れたのかエ、ドレくく私が取つ

て来てあげませうくく、サ煙草入れ、持ってお帰り、

エ、まだ他にお忘れ物、ナニお羽織、ホ、くくこれ

は私も気が付きませんでしたくく、ドレくく、ソレ

お羽織。お帰り、去にんかい、去にならんかいな、

エ、去にやがれ」

と突き出す門口、こらへかねて刀の柄、手はかけな

がら忠孝の、二字に引かれて喰ひしぼる、

「チエ、うぬ」

「ナ、何じゃエくく、齒をむき出し、草葉子をひ

ねくつて、ア、何かエ、コリヤ私を切る気かへ、面白

いくく、サアくく切られましょくく。手てから切る

かエ、首から切るかエ、おいどから切るかエ、サア早

うお切りくく、切りなんせ」

「コリヤ万野、おのれはな」

「何じゃエ、サア早うお切り、サアお切りくく、エ、

どつから切るのじゃ、貢さん」

「ム、エ、勝手にさらせ」

と道をけたてゝ立ち帰る。岩次は後に声ひそめ、

「コリヤ万野、身が刀を早これへ」

と言ふに心得のれんの内、刀かゝへて走り出で、渡

すを取つて打ち眺め、

「ヨウ、コリヤコレ身が刀ではない」

「エ、そんなら貢が取違へて去んだに違ひはない」と言ふに北六勇み出で、

「何だ貢が刀を取違へて去んだとは、天の与へく、これこそ望む青江下坂」

「ア、イヤくそれが大間違ひだわい、最前秘かに貢が刀と身が刀、中身をすりかへ置いたに、取違へて去にをつたが本の下坂」

「エ、どんな、私が一寸一走り」

「ア、イヤ申し、そのお使いは私が参りませう」

と言ひつゝ納戸を出る喜助、

「ヲ、喜助か、よく気がついた、貢に追付き腰の物を取り替へて来い、サ早うく」

と手に渡せば、

「まっかせ合点」

と、駈けり行く。万野はにわかにな付き、

「コレく申し岩次さん、お前はマアめつそうなお方じゃわいな、アノ喜助はな、確か、貢が譜代の家来じゃといな」

と聞くより岩次は興醒め顔、

「サアくく壺じゃく」

「岩次さん、壺とは何壺じゃへ、水壺かへ、塩壺かへ、但しは子壺かへ」

「ヤアコリヤく万野、あわてなく、と言ふて身共もあわてておるわい。コリヤく万野、そちは喜助に追付き刀を取り、貢が刀と替へて来い」

「ハイくく、心得ました、貢に逢ふて刀をたくり、きつとお渡し申しませう、ドリヤ一走り」と身づくろい、褌引上げて、

「ヲ、イ喜助どんく」

と声は先、体は後に心も空、足を早めて、

「ハ、ハア、ア、しんどく一寸待つて喜助どん、ノ

、ヲ、イ喜助どん」

と走り行く。岩次は後を見送つて、

「万野が戻つて来る迄は、皆を相手に二階で飲もう、

サアくこちへ」

と打ち連れて、二階へ

貢十人斬りの段

こそは行く後へまた引返す福岡貫。取違へたる脇差の、身は正真の下坂とも知らず、知らねば気もそぞろ、門の戸引明けうちに入り、

「誰もみぬか、コリヤ喜助々々、万野、万野はおらぬか、エエをらぬか」

と見廻す折しも、遣り手の万野、息もすたすた立戻り、顔見合はせて、

「ヤア貢さん、ア、しんど、ア、疲れた、貢さんお前もいかにあはてるてて、腰の物を取違へるといふやうな、龜相なことがあるものかいな。その刀こつちへ」

と、取りにかかると、突放し、

「イヤ身が刀から先へ渡せ」

「エ、マア渡さぬとて取らずにおかうか。エ、この

刀

と、取りにかかるを続けさま、打てばつしり鞘割れて、思はず知らずひと刀。

「ア、ちめた〜。ヲ、貢さん。お前はん切りなはつたなア、アレ〜」

と泣き叫ぶ。声立てさせじと口に手を当て、見れば血汐に身は紅

「ヨウヤ、〜、南無三、手が廻つたか。モウ百年目」

とまたずつかり。切られながらに逃げ行くを、戀つかんで引戻し、肋骨をぐつとひと多ぐり、そのまま息は絶え果てたり。折しも奥より北六、岩次、あとにつづいて出て来るお鹿、

「岩次さん〜。北六さん〜」

と尋ねる向ふに立塞がる。

「ヤア貫さん。アレ人殺しぢや、アレアレ」

といふ声に、

「コリヤさせぬわ」

と北六、岩次、留めにかかるを身をかはし、左へ廻る北六を、肩先下りに切りつくれば、

「コリヤ叶はぬ」

と気転の岩次、奥庭さして遁れ行く。お鹿は足も地につかず、こけつ転びつ這ひ廻る。

「おのれお鹿」

といふ声に、思はず知らず立上り、逃げ行く後ろを遁さじと、躍り上つて唐竹割。物音聞きつけ勝手より、起番男、仲居、下女、

「もの騒がしきはなに〜こと」

と、差出す仲居が手燭の光、ふり向く拍子貢が顔、見

るより三人足わな〜

「ヤレ人殺し、〜〜〜」

といふ間も待たず左より、右の腕を切り落す。『うん』

と仲居が即死のありさま、見る兩人がうろたへ廻り、

奥と表へ逃げ行く男、『外へ出でなば面倒』と、声を

もかけず後袈裟。返す刀に下女が首、水もたまらず

切り落す。音も分ちぬ寝とぼけの、小女郎が出る足

元に、血にすべつて、ぼったりと、こける拍子にお鹿

が傍、

「ヲ、このやうなところに水を流してヲ、ちめた。

ヲ、ここに寝てぢやは誰ぢやいなア。コレ起きんか

いな〜」

と、いひつゝ立寄り見てびつくり、

「アレ鹿さんが切られてぢや。アレ〜」

といふ間もなく片足、ちようど切り放せば、片足た

ちに、ひいふうみい、よろ〜〜と、鉢前の手水鉢

に取りついてそのまま、息は絶え果てし、無惨とい

ふも余りあり。

「サアこの上は岩次一人。取り遁しては刀のありか、

このひと間こそ、ムそれ」

とうかがふうちより泊り客

「アア一ぱい機嫌にぐつたりと寝てのけた、酔ひ覚

めの水の心地や朝桜ハ、ハ、ハ、ヲ、コリヤ灯が消え

てあるわい」

といひつつ出づる廊下口、うかかふ貢が刃の光、

「コリヤ堪らぬ」

と逃げ行く庭先、逃ぐる人影岩次と心得、追ふて行

く。寝間よ出づる、相方女郎、貢を客と心得て、

「もうしこの人さんわいな。どこへ行きなんす。も

うしそちらは前裁ぎますよ、落ちなんすなえ。危な

うござますよ。水ぎいますか。コレシコレ水はこちらにあるわいな」

としごきも脇へ、しどもなき、裾もほらほら、追ひ行く女郎。振り返りて拝み打ち、客ははふく樹木の蔭に、息を詰めてぞかがみゐる。『コハ心得ず』と燈籠の影に透して、

「確かに岩次ござんなれ」

と、襟髪つかみ引出し土に差付けにじり付け、

「サア下坂の刀はいづくへやりしぞ。まつすぐに自状びろげ」

と、ひしぎつけ、

「ア、もうし私はなんにも知りませぬ」

「ヤアいまになつて知らぬとは卑怯至極。いはぬといはさいでおかうか」

といふうちに来る人音に『南無三』と、ためらふ隙に

はね返し、逃げ行く、後を横なぐり、すぐに立寄り顔見れば、

「ヤアコリヤ岩次ではなし、チエ、取逃がせしか残念」

と拳を握りゐたりける。お紺は驚き心も空、こけつ転びつ走り寄り、

「貢さん」

「ヤアお紺か。覚悟いたせ」

と突きかける。

「マア、待つて下さんせいな。サア、腹の立つはもつともなれど、これにはだんく、訳のあること」

「ヤアなんの訳のこと」

と、また振り上ぐる刀の下

「コレイナア、マア氣をしづめてとつくりと、しれ見て疑ひ晴らして」

と、投げ出す包、手に取上げ、

「ヤアコリヤコレ折紙。ム、それなら宵のつれなきは」

「サイナアお前に忠義が立てさせたさ。どうやらかうやら岩次をだまし、首尾やう手に入るこの折紙」

と、いふに貢は

「ハ、ア」

いまさらに後悔、涙の折からに、喜助は心ならざれば、『もしや』と思ひ立戻る

「喜助か」

「フウ若旦那、シテこのありさまは」

「どうも堪忍はならぬゆゑ、喜助赦してくれい」

と、刀の柄に手をかくれば、その手を押さへて、

「コリヤ狼狽へてなんとなされます」。

「ヲ、狼狽へた、最前そちに預けた刀」

「サアそれはそこに持つてござるのが本の下坂」

「ヨウそんならこれが、エ、ありがたや／＼な」

「サアもうし二色ともに揃ふ上は、一時もはやう万次郎さまへ、早々お渡しなされませ」

「喜助、お紺。だん／＼の心遣ひなんにもいはぬ、添い。シテこの場の首尾は」

「へい私が呑み込みました。跡構はずと万次郎様へ」

「ム、しからば喜助、あとを頼む」

といひ捨てて、立ち出でんとするところへ、小蔭をぬつと徳島岩次

「ヤアどこへ／＼。大事の刀こつちへ渡せ」

と、打つてかかれば身をかはし、

「シヤよいところへ徳島岩次。おのれを方々尋ねしに、ここへ出でたは百年目」

と、打つてかかれば切り払ひ切り結び、すきを見合

はせひと刀。『うん』と倒るを、のつかり、

「恨みの刀受取れ」

と、刺しとほされて七転八倒。心地よくこそ見えに
けり。そばにお紺は心せき、

「夏の夜なればはや明け方。少しもはやうその刀を」

「ヲ、いふにや及ぶ。忠義を立つるも一人の情け」

と、心も勇む足勇む、忠義に心勇み立ち、屋敷をさし
て急ぎ行く。